

奄美群島の

わきゃあまみ17

はちゅう類手帳



はじめに

わたしたちがくらしている奄美群島には、ヤモリ、トカゲ、ヘビ、カメなどはちゅう類の仲間が住んでいます。そしてその多くは奄美群島や沖縄諸島にしかない種類です。

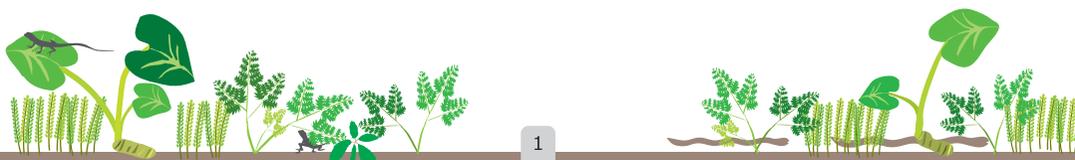
はちゅう類は自分で体温調節ができないので寒さが苦手です。しかし、冬でも暖かい奄美群島では完全に冬眠しない種類もいるため、一年を通してはちゅう類に出会うことができます。

昼間はかくれ上手なヤモリの仲間は、夜になれば虫をさがしに家のかべなどにも姿を現します。ひなたぼっこが好きなトカゲの仲間は、晴れた日に公園などで出会うことができます。ヘビの仲間の多くは夜になると活動が活発になり、道路に出てくることもあります。ウミガメの仲間は島を囲む広い海を泳いでいますね。

じつは奄美群島にくらすわたしたちにとって、はちゅう類はとっても身近な存在なのです。

意識しないと出会えないけれど、家の周りやいつもの通り道、学校などのわたしたちがふだん生活している場所にもたくさんのはちゅう類が住んでいます。

この手帳を読んではちゅう類について知り、野外へさがしにでかけてみましょう。



手帳の見方

P3～P13の見方

特ちょうがにているなかまを「科」という。近いなかまの科を集めた大きなグループを「目」という。

見つけやすさ ☆☆☆☆☆ (星の数が多ければ見つけやすい)

【全長】 ← 頭から尾の先までの長さ

名前 ← ハブ

★☆☆☆☆

奄・加・請・与路・徳
全長：100～240cm
ただようオーラは別格です

キャッチコピー
ドクロマークがあれば、どくがある

生活している場所
山 … 人里
海

特ちょうなど

この略した名前は本文でも使ってる

※ 住んでいる島 【島】 奄；奄美大島 加；加計呂麻島 請；請島 与路；与路島 喜；喜界島 徳；徳之島 沖；沖永良部島 与論；与論島

◀木の上にも登るので頭の上も注意が必要

◀目と口の間に熱を感じる器官がある

強い毒をもつ危険な生物。森の中から集落周辺、畑、海岸など、あらゆる場所に出現する。家の中に入ってくることもあるので注意が必要。熱を感じる器官をもち、ネズミなどの体温を感じたらすばやく首をのばしてかみつき、毒を注入して殺し丸のみにするほか、カエルやトカゲなども食べる。人々におそれられる一方、ハブがいるために人が森をむやみに開発しなかったため、奄美の森の守り神ともいわれている。

記ろくのある島をオレンジ色でぬりつぶしている

P13のウミヘビの見方



ウミヘビのなかま

- エラブウミヘビ
- イジマウミヘビ
- クロガシラウミヘビ
- クロボシウミヘビ
- セグロウミヘビ
- 全ての島
- ヒロオウミヘビ
- アオマダラウミヘビ

奄美群島で見られる種名が書かれている





◀お尾を上げて歩く



◀再生した尾はもとの模様とはちがう

オビトカゲモドキ

★★★

徳

全長：12～14cm

徳之島にしか
いません



世界中で徳之島にしかいない。主に森林に住むが、森林近くの人家に居ることもある。暖かく湿った日には道路にも出てくるため、交通事故も多い。以前はヤモリの仲間とされたが、まぶたがあること、指先がかべにくっつけるしくみになっておらず小さな爪があることなど、ヤモリとはちがう特徴をもつ。かつては与論島にも近い仲間がいたが、1953年にイタチが放されたことで絶滅してしまったと考えられている。



◀ややば広いお尾



◀人気のない建物にいつく

タシロヤモリ (外来生物)

★★★★

奄・加・請・与路・喜・徳

全長：8～12cm

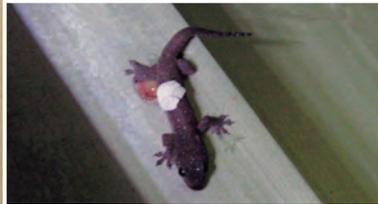
顔がほっそり
しています



山すそにある街灯の近くや、人気はあまりないが明かりががついているトイレなどの建物によくいつく、その明かりに集まってくるガなどの小さな昆虫を食べる。他のヤモリに比べてあごが張っていない印象がある。2017年に鹿児島県の外来種リストにのせられたが、それまではもともと奄美群島にいる在来生物だと考えられていた。



◀お腹の卵がすけて見える



◀孵化したてで卵のからがついている

オンナダケヤモリ (外来生物?)

★★★★★

奄・加・請・与路・喜・徳・沖

全長：8～12cm

“女だけ”では
ありません…



人里でよく見るが、人里に近い森林の中にも生息している。他のヤモリに比べて尾のはばが広いのが特徴的。日本に生息するヤモリの中ではもっとも動きが速い種である。「オンナダケ」の名前は沖縄の恩納岳で見つかったことからつけられた。しかし、沖縄諸島や奄美群島にもともと住んでいたものなのか、それとも海外からやってきた外来生物なのかははっきりわかってはいない。



◀尾にギザギザの突起があるのが特徴



◀目の模様は種によってちがう

ホオグロヤモリ (外来生物)

★★★★★

奄・喜・徳・沖・与論

全長：9～13cm

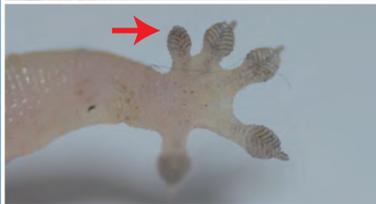
声が！
大きいです！！



船につまられた植木や資材にまぎれて移動するため、原産地がわからないほど世界中に分布を広げている。奄美群島でも外来生物。ホオグロヤモリが侵入した場所では他のヤモリの数がへる。日本で見られるヤモリの中で尾にギザギザの突起があるのは本種だけ。ヤモリの中でも大きな声で鳴くのが特徴的で、家で聞こえる「キョッキョッキョッキョ…」という声はこのヤモリの鳴き声と考えてほぼまちがいない。



◀こどものミナミヤモリ



◀第一指には爪がない

ミナミヤモリ

★★★

全ての島

全長：10～13cm

せなか ちよう
背中の模様が

目立ちます



九州南部から南西諸島全域に広く見られるほか、台湾や中国にも分布する。南西諸島の在来のヤモリの中でもっとも分布が広く、なんらかの方法で海をこえて分散したものと考えられている。山に近い人里から森林の中まで住むが、深い森の中などではあまり見つからず、どちらかという二次林のような人の手が入った森を好む。体色の濃淡は、環境により大きく変化する。



◀皮膚は茶色くなることもある



◀眼を守る半透明の膜

オキナワキノボリトカゲ

★★★★★

全ての島

全長：17～27cm

きょうりゆう
恐竜のような

すがた
カッコいい姿です



主に木の上で生活する。木の幹にとまっているときに人間が近づくと、裏側にすばやく回りこんでかくれる。地面に下りることもあり、道路でひなたぼっこをしていて交通事故にあうこともある。夜は細い枝やシダの上で眠る。奄美大島ではマングースに食べられたり、ペット用にとられたりして数がへっている。喜・沖・与論ではイタチの影響でかなりへった。逆に九州南部では船で運ばれた個体がふえて問題になっている。



せなか ちよう
◀背中の模様



ちよう
◀目の模様

アマミヤモリ

★★★

奄・加・請・与路・徳

全長：12cm 前後

ミナミヤモリと

そっくりです…



スタジイがたくさん生えている森林の中に住む。背中の模様が少しちがう以外はミナミヤモリとそっくりで、長らくミナミヤモリと混同されていたが、2008年に新種となった。このようによく調べなければ別種であることがわからない種のことを「隠ぺい種」とよぶ。ミナミヤモリとちがいの人の手が入っていない森林を好む。



◀こどもの背中は黒っぽいが大になると褐色になる

オキナワトカゲ

★★★

沖・与論

全長：19cm

数の少ない

トカゲです



名前のとおり沖縄に住んでいるが、沖縄に近い沖・与論にも分布する。この沖・与論のトカゲは、以前は奄美大島などに住んでいるものと同じオオシマトカゲだと考えられていたが、最近になってオオシマトカゲではなくオキナワトカゲであることがわかった。数は多くはない。不思議なことに、オキナワトカゲはオオシマトカゲの住む奄美群島より北に位置するトカラ列島にも分布している。



◀こどもの尾は青いがバーバートカゲより淡い



◀おそわれると自分で尾を切る

オオシマトカゲ

★★★★

奄・加・請・与路・喜・徳

全長：20cm

家のそばにも住んでいます



最近までオキナワトカゲの亜種（同じ種だがちがう場所に住んでいて姿かたちも少しちがうもの）と考えられていたが、遺伝子を用いた研究により別の種であることが明らかになった。姿かたちはオキナワトカゲにとともにしている。バーバートカゲにもにているが、バーバートカゲは尾が青く、体色も鮮やか。ただしオオシマトカゲも子供のころは尾が青く、区別は難しい。人里で見られるのはほぼオオシマトカゲである。



◀雨にぬれた道に出てきた



◀落ち葉の上にいると見つけにくい

ヘリグロヒメトカゲ

★★★

奄・加・請・与路・喜・徳・沖

全長：9～12cm

体はこげ茶でつやつやです



暗くしめった場所を好み、森の中の落ち葉の下や腐葉土の中などで生活している。そのような場所で体をくねらせて移動するためか、他のトカゲに比べて手足は短い。体の色は黒っぽいこげ茶で、ぬれているようにつやがあるが、実際にぬれているわけではない。小さい体なのに力が強い。小さなゴキブリなどの虫をつかまえて食べる。乾燥や熱に弱いため、森林伐採などで環境が変わればすぐにいなくなってしまう。



◀尾を見なければオオシマトカゲとの区別はむずかしい



◀こどもの背中には金色の線が5本入る

バーバートカゲ

★★★

奄・加・請・与路・徳

全長：18cm

青い尾がチャームポイント



トカゲの仲間はこどものころ尾が青く、大きくなると青みが消えることが多いが、バーバートカゲは大きくなっても鮮やかな濃い青色の尾をもつのが特徴。よく似た種であるオオシマトカゲは標高の低い人里近くに住むが、バーバートカゲは主に山地に住む。森林伐採のほか、奄美大島ではマングースの影響もあり数がへったが、最近では伐採がへり、マングースの駆除も進んでいるので、今後数は回復すると予想される。



◀オスには体の横に黒い線が入る



◀顔からお腹にかけて白い線が入りお腹は黄緑色

アオカナヘビ

★★★

全ての島

全長：20～28cm

すらっとスマートすまし顔



主に木の上で生活するが、太い幹よりも細い葉や枝の上にいることが多い。尾が長く全体的にスマートな体型で、動きはとても速い。鮮やかな黄緑色の個体もいれば黒っぽい褐色の個体もいる。メスやこどもは黄緑色。また、体の横の白い線の上に黒い線があればオス、なければメスと、見た目でも性別を知ることができる。イタチが住んでいる喜・沖・与論では数が少なく、なかなか見ることができない。

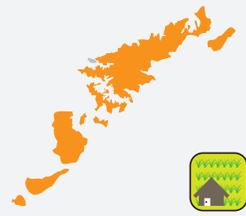


◀目と二股にわかれた舌があるのがわかる

◀体をくねらせて前に進む

ブラーミニメクラヘビ (外来生物)

★★★
全ての島
全長：16～22cm
ミミズじゃありません
ヘビなんです



全長が長くても 20 センチメートル強の小さなヘビ。一見ミミズとにているが、ミミズよりも黒っぽくてつやがあり、よく見るとウロコがあって小さな舌を出し入れするのでヘビであることがわかる。土の中でアリやシロアリの卵などを食べる。植木鉢の土の中などにまぎれて移動するため、原産地がわからないほど世界中に分布している。日本にいる他のヘビとちがってオスが存在せず、メスだけで卵を産むことができる。



◀体の黄色味が強く黒い縞が入る個体もある

◀頭と体の間にくびれがない

リュウキュウアオヘビ

★★★★
全ての島
全長：70～80cm
ごはんもミミズ
おやつもミミズ



主に昼間に活動するが、夜に見ることもある。食食物となるミミズが多いしめった森の中に住むが、暖かい季節には道路にも出てくる。ミミズを口にくわえるとめんをすするようにすばやく飲みこんでいく。アオダイショウとよばれることもあるが、本州などのアオダイショウとは別の種。体色はさまざまで、黒い縞が入るものも少なくない。奄美群島の各島に住んでいるが、イタチがいる喜・沖・与論では数が少ない。



◀お腹の黄色が目立つ

◀こどもは手のひらにのるほど小さい

アマミタカチホヘビ

★
奄・加・徳
全長：20～55cm
きらきら かがやく
虹色の体



体の背中側は黒っぽく、きれいな虹色の光沢がある。お腹側は鮮やかな黄色。動きはゆっくりで、リュウキュウアオヘビと同じく主食はミミズである。奄美群島のヘビの中でもっとも出会うのが難しいが、森の奥深くだけではなく、集落の近くにいることもある。道路わきの溝の中や雨上がりの道路で姿を見かけることもある。道路でじっとしている姿は細い木の枝のようにも見えるので、ふんでしまわないよう注意が必要。



◀オトトンガエルのオタマジャクシを食べている

◀泳いで移動することもできる

ガラスヒバア

★★★★
全ての島
全長：75～110cm
くりくりの
大きなおめめ



名前は「カラスヘビ」を意味する方言で、その名のとおり体は黒っぽい。細くてスマートで、ウロコがざらざらしている。カエルやオタマジャクシを食べるため、水辺でよく見かける。するするとすばやく動き、水中を泳いで移動することもできる。目が大きくてかわいらしい顔をしているが、毒があるためかまれると危険。ただし毒が出るのは口の奥の方の歯で、よほど深くかまれる限り毒が入ることはない。



◀大きなえものは巻きついてしめ殺す

◀砂浜に頭をつっこんでウミガメのこどもを食べることも

アカマタ

★★★★

全ての島
全長：80～170cm
近よったら
かみつくぜえ～



赤と黒の縞模様で、小さいときほど色は鮮やか。森の中から集落近くまでさまざまな環境にいる。人が近づくと頭をもち上げて威嚇してくる。かみつかれると痛い毒はない。動き回って食べ物を探し、ネズミ、鳥、トカゲ、ヘビ、カエルなどいろんなものを食べる。自分より体が小さければハブも食べてしまう。奄美群島の各島に住んでいるが、イタチがいる喜・沖・与論では数が少なく、なかなか見ることができない。



◀交尾中

◀えものが目の前にくるまでじっと待つ

ヒメハブ

★★★★

奄・加・請・与路・徳
全長：30～80cm
じっとしてるの
得意なんです



ハブほど強くはないが毒をもっている。動き回って食べ物を探すことはなく、じっと待ちぶせをしてそばにきたカエルや小鳥をとらえて食べる。体の色は茶色で、じっとしていると落ち葉や枝にまぎれてとても見つけにくい。カエルの多い沢や湿地の近くを歩くときはふみつけよう注意が必要。方言でマムシと呼ばれるが、本州などにいるマムシとは別の種である。ずんぐりとした体型はマムシに似ている。



◀木の上にも登るので頭の上も注意が必要

◀目と口の間に熱を感知する器官がある

ハブ

★★★

奄・加・請・与路・徳
全長：100～240cm
ただようオーラは
別格です



強い毒をもつ危険な生物。森の中から集落周辺、畑、海岸など、あらゆる場所に出現する。家の中に入ってくることもあるので注意が必要。熱を感知する器官をもち、ネズミなどの体温を感知したらすばやく首をのばしてかみつき、毒を注入して殺し丸のみにするほか、カエルやトカゲなども食べる。人々におそれられる一方、ハブがいるために人が森をむやみに開発しなかつたので、奄美の森の守り神ともいわれている。



◀13～19本の黒い横縞が入る

◀お腹の様子は白黒で個体ごとにちがう

ヒヤン

★★

奄・加・請・与路
全長：30～60cm
美しくても触れないで
毒もトゲももってるの



湿度の高い森の中に住み、主に夜に活動する。長くても60cmほどで、鮮やかなオレンジ色に黒い縞が入ったとてもきれいなヘビであるが、目にする機会は多くない。食べ物は小型のトカゲなど。コブラの仲間ではハブより強い毒をもっているが、口が小さいため人がかまれて被害を受けることはほとんどない。ただし個体によってはかみついてくるものもいるのでむやみに触らない方がよい。尾の先がとがっている。



◀顔のアップ



◀お腹の模様をヒャンと比べてみよう

ハイ



★★

徳

全長：30～56cm

神出鬼没の

美しい毒ヘビ



ヒロオウミヘビ



◀呼吸のため海面まで上がったきたヒロオウミヘビ



◀陸に上がるエラブミヘビ

ウミヘビのなかま



- エラブミヘビ ヒロオウミヘビ
- イジマウミヘビ アオマダラウミヘビ
- クロガシラウミヘビ
- クロボシウミヘビ
- セグロウミヘビ
- 全ての島



名前のおり海に住むヘビ。魚とちがい水中では呼吸できないので、定期的に海面に顔を出して呼吸する。水を飲んだり卵を産んだりするときには陸に上がる。毒をもって、かみつかれると危険。海水浴をしていて出会った場合は通り過ぎるのを静かに待つこと。刺激しなければ襲ってくることはほぼない。奄美群島でよく見かけるのは、エラブミヘビ、ヒロオウミヘビ、クロガシラウミヘビの3種。



奄美群島の在来のカメは、ウミガメのみ



アカウミガメ

ウミガメのなかま

奄美群島ではアオウミガメが一年中見られ、繁殖期となる春から夏にかけてはアカウミガメも見ることができ。少数だがタイマイも生息している。奄美群島で産卵をするアオウミガメとアカウミガメについて、詳しいことは「**わきゃあまみ 15 アオウミガメとアカウミガメ**」を参照のこと。

奄美群島で見られる外来のカメたち



アカミミガメ (ヌマガメ科)

ミドリガメともよばれ、縁日などでよく売られていた。ペットとして人気が高く、大量に輸入されていたが、飼いきれなくて野外にすてられたものが多い。雑食で何でも食べ、繁殖力も強い。このため、野外に出てしまうともたらいた生きものを食べたり生息場所を奪ったりしてしまい、生態系への影響がとても大きい。寿命は40年を超えるのでペットとして飼うときは注意が必要。



ニホンスッポン (スッポン科)

本州などでは在来生物だが、奄美群島では外来生物である。食べるために養殖されていたものが、逃げ出したり故意に放されたりして野外に広がった。河川や池など、淡水の環境で生活する。肉食で、カエルや昆虫、貝などのさまざまな在来生物を食べるため、生態系への影響が大きい。むやみに触るとかみつくこともあるので注意。

その他にも、カミツキガメ、クサガメ、ヤエヤマシガメなどといった外来生物が発見されている。地域の環境や人の安全を守るためにこれ以上ひろげないようにしよう。

イタチの影響で 見られなくなった はちゅう類

イタチ（ニホンイタチ）とは

本州・四国・九州に生息するほにゅう類。
畑を荒らすネズミ対策として、喜界島
(1942年)・沖永良部島(1952年)・
与論島(1953年)に移入されました。
徳之島、奄美大島にも放されました
が定着していません。カエル、ネズミ、
鳥類、はちゅう類、昆虫類、甲殻類、
魚類などの動物を好んで食べます。



見られなくなったヘビたち

与論島では2014年、60年ぶりにアカマタガ
発見されました。沖永良部島では1984年に採集された
リュウキュウアオヘビがヘビ類の最後の記録です。

喜界島では1955年以降ヘビ類の記録はありませんが、
目撃情報はあります。沖永良部島はイタチ放散直後
はまだヘビがたくさんいたらしく、採集した記録が残っ
ています。これらの島にはもともとヘビ類がいなかった
わけではなく、おそらくイタチの影響で
数がへり見られなくなりました。

絶滅した ヨロントカゲモドキ

与論島のみが生息していた
「ヨロントカゲモドキ」。この存在が
知られたのは、2014年のことです。
少し昔のごみ捨て場で骨が見つかり
新種とわかりましたが、生きた姿を二度と
見ることはできません。イタチの影響で
絶滅したと考えられるからです。

絶滅寸前の はちゅう類

イタチや奄美大島のマングースなど外来の肉食性ほにゅう類は、はちゅう類をはじめ多くの動物を食べて数をへらしてしまいます。どうすればよいかみんなで考えていきましょう。

参考文献 奄美群島の自然史学 亜熱帯島嶼の生物多様性 (東海大学出版部 編著:水田拓) 改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編 -鹿児島県レッドデータブック 2016-(一般社団法人鹿児島県環境技術協会 企画/編集:鹿児島県環境林務部自然保護課) 喜界島における鳥の巣の捕食: 営巣環境による捕食率の違いと捕食者の特定(日本鳥類学会誌 坂上舞、瀧尾章二、森貴久) 国立環境研究所侵入生物データベース (<http://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/>) 小学館の図鑑 NEO 両生類・はちゅう類 (小学館 解説文著:松井正文、疋田努、太田英利) 日本爬虫両棲類学会 (http://herpetology.jp/wamei/index_j.php) 山溪ハンディ図鑑 10 日本のカメ・トカゲ・ヘビ (山と溪谷社 写真:松橋利光 解説:富田京一) 琉球列島における両生類および陸生爬虫類の分布 (Akamata 前之園唯史、戸田守) 座間味島におけるニホンイタチ (*Mustela itatsi*) の夏季および秋季の食性と在来種への影響 (哺乳類科学 関口恵史、小倉剛、佐々木健志、永山泰彦、津波晃遵、川島由次) 鹿児島県侵略的外来種カエル (鹿児島県)

小学校 年 組

名前

2018年3月発行

制作:奄美自然体験活動推進協議会・環境省奄美野生生物保護センター
写真協力:興克樹・清水海渡・鈴木嵩司・永井弓子・やんばる野生生物保護センター(五十音順)